

翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（十八）



図版1 九編上原裏表紙（色刷）、九編下原表紙（色刷）

凡例

一、「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（十七）」（『京都光華女子大学／京都光華女子大学短期大学部 研究紀要』第五十五号、平成二十九年十二月）の後を承けて、京都光華女子大学図書館蔵『雪梅芳譚犬の草紙』の「九編下」を、図版を掲げつつ翻刻する。合巻『雪梅芳譚犬の草紙』については、「初編上」の翻刻を掲載した『光華日本文学』第十二号の「凡例」を参照いただきたい。

一、翻刻の方針のみあらためて掲出する。

1、図版は各丁見開きを一面とし、丁付けにより「一ウ、二オ」のように示す。

2、本文翻刻は、やはり「一ウー二オ」のように冠し、改行位置は／で示し、丁移りは「」で示すが、書入れについては丁付けにこだわらない。

3、一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ半丁ごとに分離する。

4、原文はできる限りそのままとするが、漢字仮名とも、異体字、略体字は現行のものに改めた。

5、読みやすくするため、句読点を補い（ただし、序文の句点は原文のままとし、その旨を断わった。まれに原文中に出てくる句点には、「ママ」と傍注した）、会話文については「」を、会話中の会話文には「」を補った。原文にある「は」に改めた（原文の「あるいは」は、「と」とした）。さらに仮名を適宜、漢字に置き換え、その場合もとの仮名をルビに移した。

6、原文の振り仮名は、右と区別するために（ ）に入れた。ただし、袋表紙および序文等、一部原文のままの振り仮名に（ ）をつけなかつ

肥留川 嘉子
隅田 三鈴



図版2 原表紙見返し、十一才

たところがある。その場合は、その旨を断わった。

7、書入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に記した。

8、本文中にある読み進めるための合印については、すべて●で統一した。

9、「初編下」に至って出てきた、本文中の○（段落を改める意識で使われている模様）は、その位置にそのまま翻刻した。

一、末尾に、前号までに倣って、「九編下」に出るもののみながら、登場人物名（まれに地名もある）と、元の読本『南総里見八犬伝』の相当する名称との対照表を付した。

〔原表紙〕

九編下

笠亭仙果鈔録

一陽齋豊国画

葛吉板

〔原表紙見返し〕

雪梅芳譚／犬之雙紙

九編／下冊

葛吉板

立齋

〔十一才〕

三

木立の後ろに岳藏が／覗ひ見るとは知らずして、／賢隆は刀を収め／息絶え果てたる破魔児を／抱き上げ、懷より／葉を取うで口引き／開けて押



図版3 十一ウ、十二オ

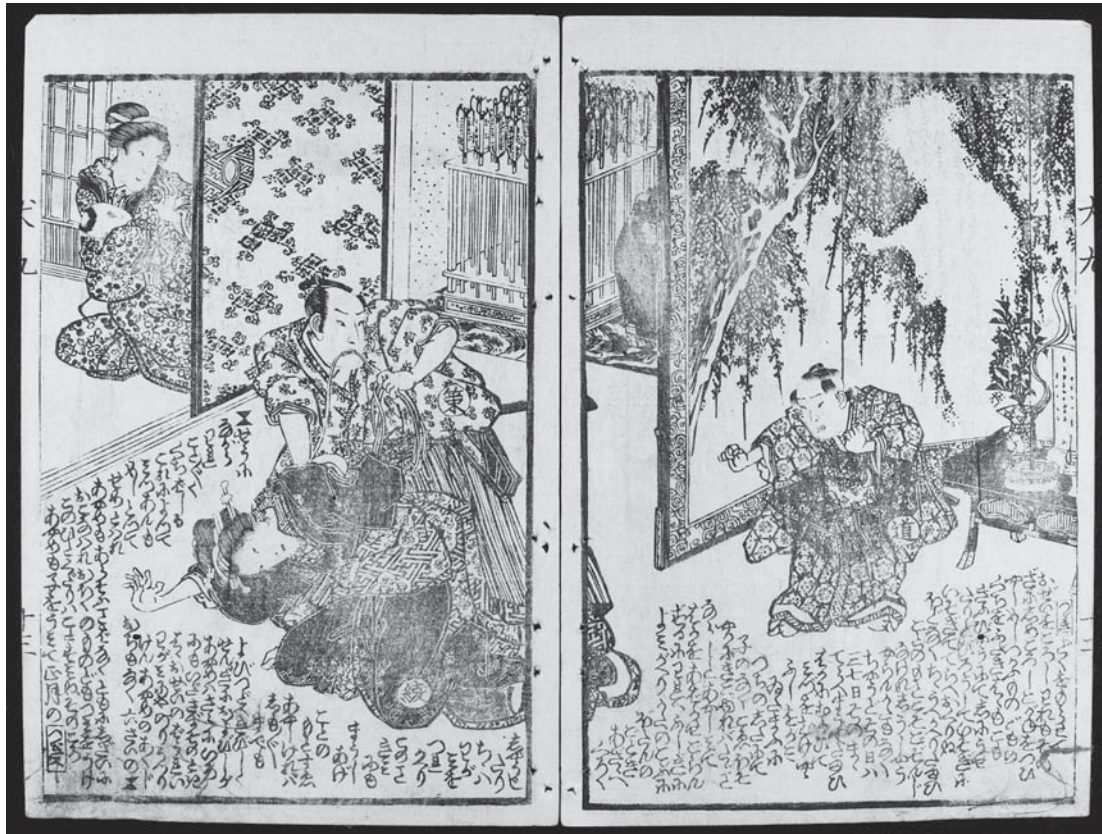
し含め、「女く」／と呼び生かし懇ろに／勞れば、破魔児は息を／吹き返し、おろく／心は付きながら、怪／しき人の介抱に／驚き振り切り／逃げんとするを、しつか／と抱きて、『やよ／女、何も知ら／ねば恐ろしく／思ふも道理。』苦痛を忍び／我が言ふことを／よつく聞、年／頃日頃の望／みを遂げ、心／安く最期を／遂げよ』さ、さう／言ふ其方はまア／誰人』『名乗るは／憚り多けれど、／夜山で聞、知る／人もあらじ。

つぎへ

此處より次二丁／の絵は道節がむか／し物語／なり。今ある／ことにはあらず。

〔十一ウー十二オ〕

つぎ 某は其方の為／異腹の兄、犬山／道まつたゝともと呼ぶ／者にてあり。主君と／父の仇を討つ軍用／金を集めんため、妖しき／行者と様を變へ、去年の／秋より東の国々／巡りて火を踏み熾を握り、／愚かなる民百姓誑／かしては布施を貪り、行くところ／にて火定を示し、彼處に／死んでは此處に生まれ、寂／寞道人賢隆と呼ぶ山伏は我がこと／なり。主君煉馬平左衛門倍／盛朝臣は去年の夏、池袋にて／討たれ給ひ、我が父犬山道策／入道道與様も共に討死。／我も共にと思ひしが、手に合ふ敵も／無き上に、同じくは世に存／へて仇を報／いん志。家に伝はる忍びの術、隠形おやう／五遁とんの第二にの法、火遁といひて火に寄れば／形を隠す一奇術いづつ、十五の歳より密かに／学び鍛錬なすこと三が年、漸く行ひ得／たる故、今これを以て世を欺き、火に入ると見せ／火に入らず。集めし金銭、数／の宝を／積んで一戦起こさんとする我が大望。またこの／豊島に愚人を寄せ、形の如く／欺き果せ少しの宝を／集めたるが、思へば斯様の／幻術にて軍用金を／集めんこと、忠孝の／道は立つともまた盜賊の／業に等し。拙きことを／したりしかなど、今日しも／更に後悔し、我が隠れ家へそのま、／行き山伏姿／打ち捨て、「いで／この上は運に／任せ、力／限りにさだ／まさを狙ひ／討たん」と心を／定め、暫し／信濃に身を潜／めんと姿を／改め、またこの円塚／通りか、りし折も折、其方



図版 4 十二ウ、十三オ

は／既に手負うたり。あら不便やと思ふにも／様子如何にと躊躇ひて身を隠して見聞／すれば、非義六とかいふ庄屋の娘、実の／父は煉馬の御内に、名は知らねどもありとの／一言。さては我が異腹に睦月と呼びし／妹あり、二歳の時大須賀の村長へ不通／養子に遣はされしはこの娘。嗚呼今一足／早からば、薄手も負はせはすまじきにと、悔やむに／つけても非道の悪者、彼奴も乳の下打ち／貫き当の敵は取つたれども、其方も急／所のこの深手、療治を為すとも助かるまい。●幼き／時より／実の親／を慕ひし孝行、／甲斐ありて不思議に此処に／巡り会ひ、兄妹の／名乗りして親人の名は告げ／ながら、命一つを救ふ／こと叶ひ難きもいは／因／果。事長けれども語る／べし。迷ひを晴らして／成仏せよ。其方の／母は綾女と言ひ、父／上の妾なり。また我が／母は於ゑとて同じく／父の妾なれど、男子／産みたる徳により●●本妻に／引き上げ／られぬ。その／初め、父の本妻／子無き／内に／身罷り／給ひ、／後に／妻をば／娶られず、／件の綾女と／於ゑとを／再びに／召し抱へ、／共に／寵／愛／浅からず。／ある時／父の／宣ふには、／「二人の／内／男子を／産む者／あらば／後妻に」せん」と。その／後於ゑ／懐妊して／長禄／三／年九月の／戌の戌の日に、この／道まつを安／産あり。／左の肩に／瘤ありて／松の小節に／似たりとて、道／まつと名乗らせ／らる。我が六歳の／時なりしが、父は都へ／使者の留守、／綾女は我／より後に／來りし／於ゑの／出世を／常日頃／世に妬ま／しく思ひ／けん、いまさか／蜜あんと／いふ医者に／つぎへ

〔十二ウ—十三オ〕

「つぎ 毒を盛らせて／於ゑを殺し、我もその／座に締め殺し、金を費／やし召し使ふ者其の／口を塞ぎ、母も子も／急病にて死に失せ／たりと披露して、急ぎに／急ぎて寺へ送りぬ。／程なく父上帰り給ひ／事の元こそ御存じ／なけれ、愁傷／遣らん方もなく／丁度その日は／三七日、そのま、／寺へ詣で給ひ／墓に向かひて／水を向け、や、／伏し拝み／居給ふに、／土の下にて／子の泣く声細／やかに聞ゆれば、徒事／ならじと怪しみて／墓を暴かせ御覧／ずるに、我は不思議に／蘇り、肩の瘤に／牡丹の／如き／



図版5 十三ウ、十四オ

癒、へ／黒く／生じたり。父は／我が身を／連れ／帰り、／このこ
 と／君にも／申し／上げ、／事の／本末／怪しければ／下ぐ／までも／
 呼び集へ、厳しく／詮議に及びしが、綾女は更に色／にも出ださず。その
 時／母於嘔の亡霊／我が身にや乗り移り／けん、綾女の悪事／落ちもなく六
 歳の●●小児／ながら／我／悉く／口走る。これによつて／蜜あんも
 召し捕つて／責め問はれ／綾女も争ふ言葉なく共に死罪に／行はれ、多
 くの者共罪を受け／この一件は事済みぬ。その頃／綾女も子を産みて、正
 月のつきへ

〔十三ウー十四オ〕

つぎ／誕生／生なれば／聴て睦月と／名乗らせ給ひ、女にてその／年二
 歳。善か／らぬ母故／その子には罪／なれどもやし／なひ難く、事の／由
 は秘し隠し、永楽銭七貫文／添へて親子の縁を／切り、不通養子に／非義
 六へ遣られし／ことも、十二の／歳初／めて父の／物語り。兄妹／なが
 らも／母人の／敵の／産んだ／其方の／こと、心／にも掛けざりしが、
 実の母には引き／替へて、行ひ正しく／孝心深く貞節／類もなきものか
 ら、仕合はせ悪くて末／遂に非業に／死ぬるも、母／親の身を／殺しても
 猶あ／まる／罪を。●●果たすと諦めて、その場を／去らずその身の敵、
 兄が／取つたを思ひ出に執／念残さず目を／塞ぎや。父は生／年六十二
 歳、／さだまさが家来／なるあまど／さん平に。●●討たれ／給ふ。我／
 その敵を／狙ふが故、命／全きことを願／はず。返り討ちにも／遭ふな
 らば、程なく／冥土で対面せん。その時こそは父へ／執り成し、再び／
 親子と呼べる、やうに／この兄がして／取らせう。遅かれ／疾かれ／一度
 は／死ぬ。髪こそ／剃らね山伏の／姿に変へしを縁に／因み、父母妹
 の「菩提を問ひ、かつは人目を／忍ぶため、これより有髪／の僧そに出で
 立ち、父の／出家名道策と／言ひ／しに基づき道節と／今より名をも
 あら／ためん」ト言ひつゝ、弱る／破魔児を／手負ひに慣れたる●●
 勇士の／介抱、／血筋の／真あら／はれて泣かぬ／も却つて／哀れなり。
 最前よりも／岳藏は兄と妹／の問ひ答へ、聞くにつけ／見るにつけ、か
 つは嘆き／かつは驚き、疾く駆け出だし／名乗りもなし、また手負ひ／を



図版6 十四ウ、十五オ

も慰めんと思へど、／さらば道節の身の上／話の腰折りて聞、たき／ことも聞かれまじと●●駆け出し／かけては足を／止め、強ひて心を／落ち着け、息を殺して／聞、居たり。破魔児は次第に／傷痛み息も弛げに／目も眩み、我かの気色に／なりつ、も自ら心を励／まして『今際の際に年頃／の願ひ叶ふて親の御名 つぎへ』

〔十四ウー十五オ〕

つぎき知つたばかりか、兄さんに会ふは何より／嬉しけれど、面目もない母御の邪。／人を殺してその身も斬られ、事は済めども／敵同士。連る、私も憎からうが、息ある／内に敵を取つて下さんした、その真実に甘へるやうに思はんしよが、とても因果な／私の身の上、死ぬる命は惜しからず、思はぬ／人に盗まれて同じ野原に諸共に／死なば本末知らぬ人、心中／したかと疑はう。それも黄泉路の／障りなれど、それよりも猶／百倍増迷ひの種は／夫の身の上、案じられて／なりませぬ。夫犬須賀／篠兎といふは、前の管領／持氏様の／家来に犬須賀／磐作といふ／人の一人／息子。養ひ／親の甥御／なれど打つて／変はつて正しい／氣質。武芸、／学問、人／に勝れ／由ある／武士にある／なれど、をさ／なき時に／父御に／離れ、鬼／のやうな伯母／婿夫婦に／引き取らへて／養はれ、／奉公／人もお／なじ／あし／らひ。／●●／それも／時世と／諦めて／更に不／足の顔も／せず、親の遺言／違へじと持ち伝へたる／太刀一腰、若君／達の御形見村雨／丸といふ御宝、許我の／館へ参らせて身をも立てんと／我も思ひ、伯母伯母婿にも／勧められ、巧みありとは露知らず／旅立ちありしは昨日の朝。私と／縁を結ばせたも村のお方の手前／ばかり、打ち合はせする年になつて、あらう／ことかあるまいことか陣代様の頼みも／受け込み、また悪巧みの手伝ひをさする／ばかりに浪人の鱧次にもまた私をば／嫁にやらうと口任せ。悪の手上は●●●あの浪人。掬り替へくれよと頼／まれた、その村雨を自分の身に付け／私をさへも盗み出し、身を穢／させうとする憎さ。騙して刀を／取らうとしても、か弱き女の／つひ打ち負け、死ぬのは是非も／なけれども、実の契り／も結ばずに、ゑ、懐／かしい慕はしい。泣いて／別れた／暁に／彼方も／涙飲み／込んで『随／分忠実で』



図版7 十五ウ、十六オ

と／仰おほしやつた、／あれが此この／世よの暇いとま／乞こひ。村雨むらぐれ／丸まるは鰐次はも／めに揃そろす
 か／替かへ／られしと夢ゆめ／にも知らず、／大須賀様いぬずかさまが／さぞやさぞ、／偽にせの太刀たち／
 をば差さし／上げて／粗忽そこつの』咎とがめに／どの／やうな／難儀なんぎをばして／ござん
 せう。さアこの／ところが私わたくしのおた／のみ。どうぞ兄あにさん許こ我へ／行き、
 大須賀様いぬずかさまに鰐次はもが／腰こしの刀かたなを届とどけて下くだ／さりませ。拝をみまする』と言いふ／
 こゝろしだい／声こゑも次第しだいに弱よわ断だん／末魔まつま。『その村雨むらぐれはこの／ことならん。あッあ不便ふびんな
 其方そちが頼たのみ、母ははと母ははとの／故ゆゑを以て承うけけ引ひかぬでは／さら／なされど、
 聞きけばいよ／／好このもしき、前さきの管領くわんれい／持氏公もちうじこうの御家おいへ／に伝つたへしこの御
 太刀たち。／君きみの仇あたなる／さだまさ／等らに／近ちか／付づくに／●良よき／手土産てみやげ。
 おも思おも／はず我が手わてに／入いつたるは願望ぐわんまう／成就じやうじうの時節じせつ到来とらい。／本望ほんまう遂またげしその
 上うへには、／篠兎しうととやらんに返かへしもせん。／されども敵かたきはつぎへ

〔十五ウー十六才〕

つゞき 大敵なり、返り討ちにも遭ふならば／太刀も分捕りせられんず。されば確かに／其方が頼み肯ひたりとは言ひ難し。／つれなき兄と恨みんなれど、妹が／夫の身の上に難儀ありとて主人の／敵、余所に見ては居り難し。妹に連る、／恩愛に忠義を代へる道はなし。／ト言ひ放されて胸迫り、『そんなら如何でもその御太刀、すぐにを／とへ届けることは』『如何もならぬ』／『ぢやと言うて犬須賀様の命の／程も知れぬ災難。し兄さん』／『何と言うてもならぬことだ』／『破魔児はじつと道節の顔打ち／守り、はらく涙、一声／「あつ」と叫びも敢へず、はつたと／転びて息絶えたり。』道節も涙を／浮かめ、『妹が切なる／願ひ承け引かれぬも武士の／意地。あッあ不便な最期ぢやなア。』せめては仮の野辺送り。冥い土の苦患を／助けんと死散を抱き上げ、火定の穴へ／そろ／と押し下ろし、猶焚き残る柴、薪／投げ入れ／吹きつくれば、下燃えの火燃え上がり／煙は空へ立ち上る。『泡影無常、弥陀方便、／一念唱名、頓生菩提、南無阿弥陀仏』と／回向しつ。『忠義の爲とは言ひながら、愚昧の民をあざ／むきし火定の因果目の当たり、妹の身を焼く火と／なれり。我も何処の里に死なん。儂きものは四の巻へ』



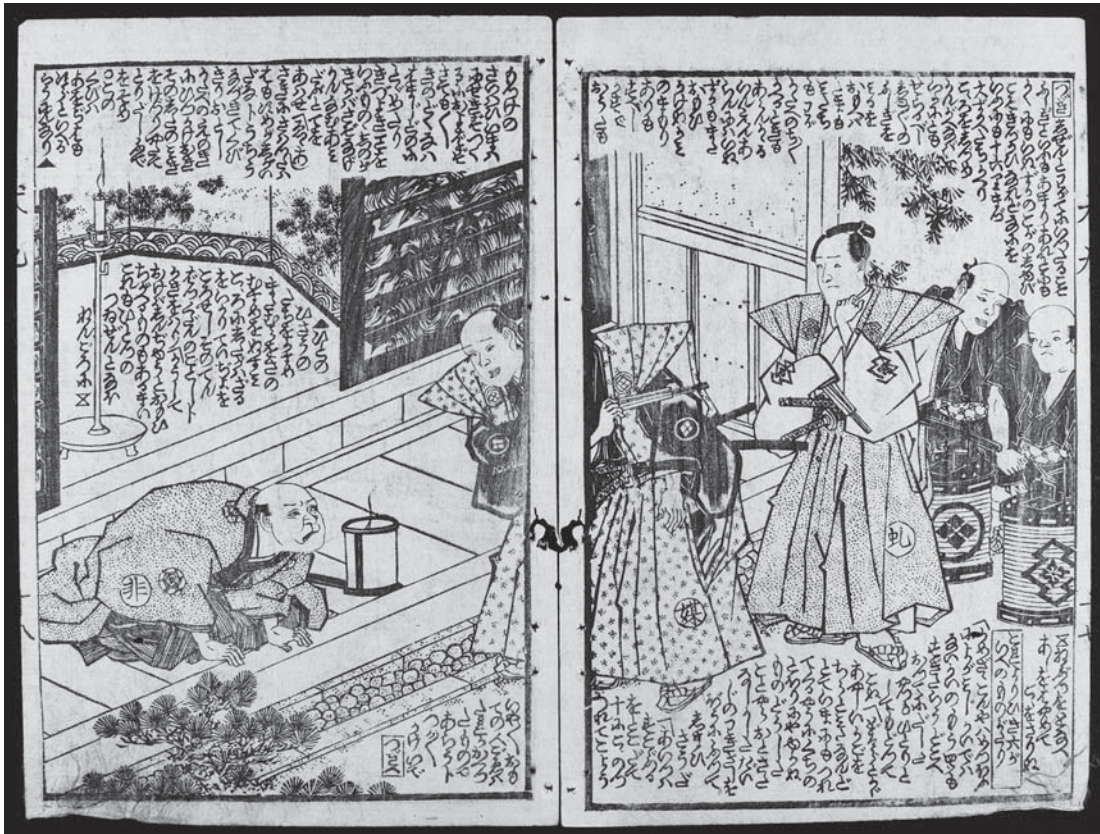
図版 8 十六ウ、十七オ

四

三の巻より 憂き世の中」と二人眩き、件の太刀腰に差し添へ、二足
 三足、この所を去らんとすれば岳藏／今は堪りかね、曲者
 待て」と言ふより早く木陰を駆け出で、刀の鏢、掴んで
 後へ引き戻す。道節／驚き踏み留まり、鏢を返し払い退け、太刀を抜
 かんとする隙に、横に引つ組み動かさず。「小癩な奴」と身を捻り、互
 ひに取り組み挑み合ふ。勇士と力者のあい／声、踏み鳴らす力足に
 は大地も窪むばかりなり。暫くあつて●岳藏が肌身離さぬ守り
 袋、如何にしてか紐乱れて道節が刀の提げ緒に／くるりと●
 纏はり付く。それを取るべき暇なければ、遂には紐の引き切れて、袋
 はかた／なの腰に付くを／取らんとする間に、道節は●はや手を振り
 解き、太刀／抜き、抜く、「汝／真つ二つ」と打ち／掛ければ「心得たり」
 と／岳藏も抜き合はせて／受け流し、また斬り入る／も手利、と手利、手
 練に／勝り劣りなく、二十余合も／戦うたり。空には月の／明らかに片方
 に茶毘の燃え／増さり、更に真昼の如くなれば／互ひに危ぶむ心なく勢ひ
 いよく加／りて、道節喚いて打つ太刀を／岳藏かつしと受けたれど、切
 つ先／余つて腕に当たり、ざつと流る、血潮も見遣らず、受け返した
 る太刀風／鋭く着込みの綿嚙裏をかき、肩先の／瘤切り裂けば、黒血た走
 り光る物／瘤の内より飛び出で、岳藏が胸に／当たるを、左手に受け止め
 帯に／挟み、また隙間もなく斬り／入るを、道節受け止め／声を上げ、「暫
 く待て、言ふことあり。世の常ならぬ／汝が武芸、大望の／ある某が
 此処に勝／負を決せんは無益の至り。／まづその太刀留めよ、つぎへ

〔十六ウー十七オ〕

つぎ／引けよ」と言はせも取へず、「卑怯なり。それほどに命／惜しくば
 村雨丸／渡して早くこの／場を去れ。犬須賀條兎と／義を結ぶ、我は大河／
 壮介義任。犬須賀が／許我の難儀今／救はずば、鰯の／干し魚となつて
 の／後いくらの水を／注いでもその甲斐なし／との諭への通り、仇／討ち済
 ましてその上に返／さうとは我が身勝手。其方の／忠義は立つにもしろ、



図版 9 十七ウ、十八才

それでは／此方の都合が悪い。さア／渡せ」と詰め寄れば、道節／
 らと打ち笑ひ、『妹／＼にさへ許さぬ太刀、汝／＼取られて済むものか』
 『取つて／みせう』『いゝやならぬ』『嫌なら斯う』と打ち込む太刀、／右
 に左に支へつゝ、じり、／＼と退きしが、／隙を見合はせ火定の穴へ道
 節ひらりと飛び／入つて、煙に姿はかき消す如く行方も知らず失せにけ
 り。／岳藏火の穴差し覗き彼方此方と探れども、影だに／見えぬに呆れ果て
 『さては彼奴め、火遁とかいふ幻術を／使ひをつて形を隠し逃げ去つた
 か、残念／＼。さるにても／彼の傷口より飛び出しては、そも何ならん』と
 取り出だし／火影に寄せてよく見れば、篠兎と我とが所持なしたと●●大
 きさ少しも／違はぬ玉。「これには／忠の字顯れたり。／沼田助が人に
 遣りし／玄吉といへる子も●●信の文／字の据はりし／玉、所持／なす
 由を／篠兎より／聞く。●●それ／のみならず／またこの／道節、／我等
 に／縁ある／ものならん。／我がかの／玉を／入れたる／守りは／彼が／刀
 の／提げ緒に／纏ひ／彼が肩／より出で／たる／玉は／つきへ

〔十七ウー十八才〕

つゞき 自然と我が手に入つたるこそ／不思議といふも余りあれ。 ともにも／かくにも犬須賀の許我の首尾／こそ氣遣ひなれど、何をいふにも十六里。まづ／大須賀へ立ち帰り／心を静め／考へなば／如何にとも／せらるべし。／種々の／不思議を／見るを／思へば／玉も／御太刀／も我が／方へ後／／帰る時も／あらん。かゝる／因縁あ／らんには、犬／須賀もまた／思ひ／かけぬ神／の守り／ありも／すべし。／掠手／負うたも／勿怪の／幸ひ。今は／偽傷作／るに及ばず。／さても／／氣の毒なは／破魔児殿に／留めたり。／氣強きことを／言ふものゝ、篠兎が／聞かばさぞ嘆かん、南無阿弥／陀仏」と手を／合はせ、『ゑ、足／先に触つたは／鱧次めが死骸／だな』ト打ちう／なづきて首／切り落とし／片方の榎／に引つけ置き、／その下の幹／を削り矢立／取り出し筆／を染め、／「○この／首は／青地／鱧／次郎といへる／浪人なり。●●他人の／秘藏の／太刀を掠め、／また村／長の／娘を盗み／心に従はざる／を怒り、貞女を／殺せしその天／罰、件／の如し」ト書き終はり、『斯うして／おけば心中と思ひ／違へる者



図版 10 十八ウ、十九オ

もあるまい。／これも一つの「追善」と猶／懇ろに●●念仏を唱へ／足を速めて／此処を去りぬ。

これより非義六が／家の物語

『瓶ざ、今夜は滅法に夜が短いではないかい。もう四ツも過ぎたらう。何所へ追つ手に出した／奴も、一人として戻つて来ぬ』『ど太郎とか、怪しい駕籠をちらと見たなど／とて、今にも連れ／来るやうに、口の通りにや行かぬもの。如何した／ことやら音沙汰／なし。貸した大／事の脇差を／棒に振つてしまひ／さうだ』『彼奴は／頗る男伊達、／十に九つ／連れて来よう。』いや／／おも／ての人声は／誰か帰つたもので／あらう』ト／つか／／駆け出で／つぎへ

〔十八ウ十九オ〕

『つぎ／駆け戻り、／『さア／大變、婿／殿が箱／てう／ちんでござつた。』いやはや、これは何として』よいであらう。のう瓶ざ、俺は／がた／震へて来た。そりやこそ／立派に「物申」と言つたぞよ／／トうろ／／として立ち／居つ、／『え、お前は袴の／後ろが捻れてゐるのに気が付かぬか。／まア羽織をはさしやりませ』／『どつこい、これは裏の方だ』『物申／／』『あい／／、今参ります』／ト言ひ／／瓶ざ、勝手へ出で、うろ／／したる女を呼び立て釜の下など焚きつけ／さすれば、非義六も詮方なく座敷の／蟬燭接ぎ替へつ、玄関の式台へ／洪／／這ひ出で、へたりと座し、／『さて／／お早い御来臨。／忝なござります』ト／案内すれば、ひがみ虬六、／仲人媒次も会釈／して、座敷へ通つて座も／定まり互ひに慶ひ／述べ終はれど、茶を一つ／だに出す者無し。『さア／お杯／／、早う／／』と／非義六が手を叩けども、「はい／／』と返事のみにて埒明かず。／久しくありて瓶ざ、は恭／／しく州浜の台持ち出で、座に／着けば、小女共は羹を運びて／銚子を持ち出でたり。瓶ざ、は顔差し出し●●『ようお出でなさり／しました。そして／今夜はお暑いこと。／この上共にお目掛け／られ、御機嫌宜しく／お恐れながら目出度う／



図版 11 十九ウ、二十オ

一つ、お心安くお吸ひ／物、冷めぬうち」ト元／末摘／はぬあい／さつ／
に／口を／窄め／目を／細め、色／品つく／るは／●●／よけ／れども」塗
らず／ともよい／おし／ろいを／こて／／化粧し／●●／鼻の／辺り／鍋
墨／強か／付けたるは／勝手の／世話の／しるしを／表し、／可笑しくも
また／浅ましけれど／心も付かず喋り／ゐるを、各／は／**つぎへ**

〔十九ウー二十オ〕

つぎ見ぬふりして、噴き出す口を閉ぢ居たり。／非義六は苦り顔、『瓶
ぎ、手前は／何の／面だ。彼方へ行き遣れ』ト苛立てど、『珍し／さうに
私が顔、墨でも付いてはゐは／しまいし』ト、真顔になるほど猶可笑し。
／虬六は羹引き寄せ、『大方味噌は／三河でござらう。鯰の筒切り、／新
牛蒡の／笹掻きは／良いお手／際』／婿／様のお気に／入つて媒次も恐
悦。／どりや／一つ御相伴を』／ト汁を吸ひ、箸に／挟めば『嗚呼、これは情
け／ない、古束子』／『束子とは／そりや大変。料理人／めがきつい粗相、ど
うぞ／御免下さりませ。なる／ほどこれは鯰ぢやない。／はや取り替へよ』
ト瓶／ぎ、を非義六は叱り／散らし、方／ぐ／にはさか／づきを勧めれば、
『さらば』／とて虬六はなみ／く受け／一口飲みしが『あつ』と／叫び、杯
投げ出し／噎せ返り咳き上げ／苦しめば、『また何事か』と瓶さ、は』
色は青褪め胸は潰れ、背な撫で／摩れば、非義六は白湯を勧めて／媒次も共
／介抱するに、／虬六は熱き涙を押し／拭ひ、『これが慶事の故実か／知
らず、酒かと飲めばありや／煮え酢だ。何ほど饅へた酒／にても、あれほど
酸くはない／ものを』ト余りのことに／腹も立、れず。非義六／銚子に鼻
を付け／『成程酢だ／。いや散／。』／何とお詫びを申さうやら。／勝手
に氣の付く者は／ないか。取り込む程が／ある。馬鹿者共め』と／叱つて
も、羹盛りし／も酒つぎしも皆瓶／ぎ、が為せし業。心／慌てし上の粗
忽、／他人を咎めん由も／なし。媒次は山／／氣の毒がり、『夜更けの／酒
盛り、勝手の混／雑。たゞ何よりも／花嫁御病氣／治つて床杯、首尾／良
く済むのが馳走の第一。／ひがみ氏は通り者、上方にては**つぎへ**



図版 12 二十ウ、原裏表紙見返し

〔二十ウ〕

つゞき 粹といふ。腹を立つのは／野暮のこと。酸っぱいのを／辛抱するが粹だ／粹だ」と執り成され、／再び杯取り／上ぐれば、「御免なされて／有難い」ト銚子／杯改めて／それより様／饗したりしが、／『もう夜も更けん』ト床急ぎ。／媒次も頻／りに急ぎ立て、／『御馳走は／これで十分。／嫁御は何として／ござる。破魔とも兄とも言ひ出さぬは幽霊の／浜風と、消えな／くはなりはせぬか』ト伊左衛門／門の言ふやうなる台詞も虫の知らせ／なるべし。『死ぬ氣遣ひはござりませぬ』ト宵より痞えが起こり通し。もう／暫く御酒を上がり、お待ちなされて／下さるやうお執り成しを」ト囁けども、／媒次は頭を左右へ打ち振り、「嫁御の／病氣は予て承知。まアどれほどの容態か、／某直に／一見せん。寝間へ案内するがよい。この場に／なつて馬鹿／しい」ト腹立ち声に瓶さ、は／「もう斯うなつては隠されぬ。有り様に仰れ」ト●●非義六が袖を引けば、媒次は／早く耳に入り、『有り様とはそりや／何事』／『ハイ、／破魔／兄は／駆け／落ち／致し／まし／た』

仙果鈔録
豊國画

〔原裏表紙見返し〕

嘉／永／八／乙／卯／春／新／鐫／目／録

(振り仮名は原文のまま)

大晦日曙草紙 廿二編／廿二編 京山作／芳綱画
童謡妙々車 初編／二編／三編 種員作／國貞画
八大傳犬の草紙 卅三編／ヨリ／卅八編／マテ 仙果録／豊國画／國貞画
松浦船水棹婦言 四／五 仙果録／國芳画
御賛美少年始 十二編／十二編 同録／國綱画
八重撫子累物語 三／四 同録／國貞画



図版 13 九編下原裏表紙 (色刷)、十編上原表紙 (色刷)

捺印

〔十一才〕

村田

米良

俠客傳けうかくでん 摸略説もろくせき 十二編／十三編 西馬譯／同画

花はな 蓑笠梅雅物語ののかさめわかのがたり 四／五 西馬譯／國輝画

嶋巡しまめぐり 浪間朝日奈なみのあさひな 七編／八編 種員譯／同画

旅雀たびすずめ 我好話あいやどばなし 初／二／三 種清綴／國貞画／種員閱

鹽屋しほや／文正ぶんせい 古今草紙合ここんさうしあはせ 十二編／十三編 仙果作／國輝画

東都南傳馬町二丁目／地本問屋萬屋吉藏板

登場人物一覧（九編下）

次に『雪梅芳譚 犬の草紙』九編下の登場人物名（その他）をかけた（読み仮名・漢字とも表記は原文のまま）、その下の「一」に、相当する『南総里見八犬伝』の登場人物等の名を示す。

犬須賀篠兎成孝【犬塚信乃成孝】

犬須賀磐作一成【犬塚番作一成】の子。磐作の死後、伯母瓶ざ、と伯母婿非義六夫婦に養われる。亡父から託された亡君持氏【足利持氏】の宝刀村雨丸【村雨】を、非義六の刀とすり替えられたことに気づかないまま、持氏の子成氏【成氏】に献上するために許我【許我】へと旅立った。会話にのみ登場。

破魔児【濱路】

非義六、瓶ざ、夫婦の養女。許婚の篠兎が許我へ旅立った翌日、突然ひがみ虬六と婚礼させられることを知り、篠兎への思いから首を括ろうとしたが、青地鯉次郎によって連れ去られてしまう。鯉次郎の口から村雨丸のすり替えを知らされ、刀を取り返そうとするも、あえなく斬られ、とどめを刺されそうになるところを、通りかかった山伏の寂寥道人賢隆に助けられる。その賢隆から、実は賢隆が腹違いの兄犬山道節であることや、自分の出生の秘密、本名が睦月【正月】であったことなどを聞かされた。兄道節に村雨丸を篠兎へ返すようにせがむが拒まれ、失意の内に事切れた。

犬山道節たゞとも【犬山道節忠興】

長祿三年九月の戊戌の日に生まれる。父は犬山道策入道道興、母は妾の於嘸。実は破魔児の異腹の兄。池袋【池袋】の合戦にて父があぶさがやつのしゆりのだいぶさだまさ【扇谷修理大夫定正】の家臣あまどさん平【竈門三寶平五行】に討たれ、その敵討ちのために寂寥道人賢隆【寂寥道人肩柳】という山伏に姿を変え、軍用金を集めていた。円塚【円塚】で火定の術を行なった後、瀕死の破魔児にとどめを刺そう

としていた鯉次郎を倒して村雨丸を手に入れる。破魔児を看取った後に突然現れた岳藏に村雨丸を返せと迫られるが拒絶し、斬り合いの際に道節の肩の瘤の傷口から「忠」という文字の玉が出てきて、岳藏の手に渡る。そのとき同時に岳藏の玉が入った守り袋は、道節の刀の提げ緒に巻き付いて切れ、道節の手に渡る。

岳藏【額藏】

非義六の下男。篠兎と兄弟の義を結ぶが、非義六夫婦を欺くため仲の悪いふりをしている。篠兎の許我への旅に同行し、その途中にある栗橋の宿屋で篠兎と別れ、犬須賀村【犬塚村】へ帰ろうとするが、通りがかった円塚にて道節と破魔児の会話を立ち聞きし、道節が鯉次郎から手に入れた村雨丸を取り返そうと迫るも逃げられた。

青地鯉次郎【網乾左母二郎】

犬須賀村に住む浪人。瓶ざ、に、し果せたら破魔児の婿にすると唆され、篠兎が持つ村雨丸を非義六の刀とすり替えるが、さらにそれを密かに自分の刀とすり替えて非義六に渡し、自分が村雨丸を着服していた。虬六と破魔児との婚礼を知り、腹いせに破魔児を無理矢理連れ去った。破魔児に迫って拒まれたのに逆上して、破魔児を刀にかけろが、道節によって倒された。

犬山監物道興【犬山監物貞興】

煉馬平左工門尉倍盛【煉馬平左衛門尉倍盛】の家老。剃髪後は道策【道策】と名乗る。道節と破魔児の父。池袋の戦いにて討死する。九編上の口絵には「犬山監物貞興」と出る。会話にのみ登場。

於嘸【阿是非】

道興の妾。道節の母。同じ妾の綾女によって毒殺された。会話にのみ登場。

綾女【黒白】

道與の妾。破魔児の母。男子を生んだ於ゝ毒を妬み、道與の留守中にいままさか蜜あんと共謀してこれを毒殺した。しかし後に露見し、死罪となる。会話にのみ登場。

いまさか蜜あん【今坂錠庵】

医者。綾女と共謀して於ゝ毒を盛った。後に露見し、綾女と共に死罪となった。会話にのみ登場。

大須賀非義六【大塚墓六】

大須賀村の村長。瓶ざゝの入り婿。磐作の死後、篠兎を引き取り養育していた。篠兎が許我へと旅立った翌日、娘の破魔児と虬六との婚礼の準備をしている最中、破魔児と鯉次郎の駆け落ちを知り、家中の召使い達に破魔児を連れ戻すように命じた。そのとき既に破魔児は鯉次郎に殺されていたが、それを知らないまま虬六らを迎えた。

瓶ざゝ、【龜篠】

篠兎の父磐作の異腹の姉で、非義六を婿に迎えて以後、非義六の悪事に共謀する。

とだのど太郎【土田の土太郎】

神宮川【神宮河】の船頭。破魔児を連れ戻すようにと非義六に頼まれ、鯉次郎を追いかけ円塚にて追いつき、破魔児を取り返そうと鯉次郎に斬りかかるが倒される。会話にのみ登場。

ひがみ虬六【簸上宮六】

大石ひやうゑのじよう【大石兵衛尉】の陣代ひがみじや太夫【簸上蛇太夫】の子。父の死後跡を継いで陣代となった。破魔児に恋慕し、婚礼のため非義六の家にやって来た。

ぬるで媒次【軍木五倍二】

虬六の下司。虬六と破魔児の縁談を取り持った。婚礼の夜、虬六の供をして非義六の家に来た。

